

犬山城から見た城山

国境を守る斎藤方の有力な武将でした。信長でさえ、大沢氏の力をおそれていました。

秀吉を使って

城を清洲から小牧山に移した信長は、永禄七年（一五六四）犬山までせめのぼってきました。けれど、鵜沼城をすぐにせめることはしません。

信長は、秀吉を鵜沼城に送り、信長のけらいになるようすすめますが、大沢次郎左衛門は信長を信用せず、けらいになるといいません。秀吉は、みずから人質となつて、大沢氏をときふせます。秀吉の命をかけたうったえに、ついに大沢氏は、織田方につくことを承知しました。

鵜沼をおさえた信長は、坂祝の岩谷観音の上の山にあった猿啄城などをつぎつぎにおとしました。秀吉は、木曾川を利用して墨俣に墨俣城（一夜城）を築き、とうとう稲葉山城をまるはだかにしてしまいました。

鵜沼城を失ったことで、斎藤氏の力は弱まり、永禄十年（一五六七）、さ

信長が鵜沼城を
どのようにせめた
か、はっきりした
記録はありません

すがの稲葉山城もおち、美濃は信長のおさめるところとなりました。鵜沼城は、その後焼けてしまい、当時のようなすを伝えるものは、ほとんど残っていません。大沢氏のゆくえもはっきり



大沢氏の墓 永禄五年とよめる

しません。大沢氏の墓があります。けれど、そのころにたてられたものか確かではありません。

織田信長の年表

- 一五三四 生まれる
- 一五五五 清洲城に入る
- 一五五九 尾張を平定する
- 一五六〇 桶狭間で今川氏を敗る
- 一五六二 家康と同盟をむすぶ
- 一五六三 小牧山城に移る
- 一五六四 犬山城に入る
- 一五六四 鵜沼城の大沢氏を敗る
- 一五六六 秀吉が墨俣城を築く
- 一五六七 稲葉山城の斎藤氏を敗る
- 一五六八 足利義昭と共に京に入る
- 一五七三 室町幕府がほろぶ
- 一五七六 安土城に移る
- 一五八二 本能寺の変で殺される

文学にあらわされた大沢氏

上流から一そうの舟をさおさして来て、美濃側の岸へ上がった虎ひげの武将がある。三、四名の従者もおり、一頭の乗馬も後からひきおろされた。

「虎が来た。」

「鵜沼の虎が来た。」

番所の雑兵は、眼顔でささやきあっていた。この川すじ数里の上流にある鵜沼城の主将で——美濃の猛将といわれている大沢次郎左衛門なのである。虎が来たといえは、稲葉山の城下でも、泣く子もだまるというぐらい、恐い者の代名詞になっていた。その大沢次郎左衛門が、虎ひげの中から眼鼻を出して、むっそりと歩いて来たので、番所の兵は、まぶたもうごかさずに緊張していた。

——吉川英治「新書太閤記」——

五街道を調べてみましょう。

(三) 鶉沼を通った中山道

1 今の中山道を訪ねて

宿場町、鶉沼

今から四百年ほど前、江戸を中心とした五つの主要な街道がありました。その一つが中山道で、鶉沼を通っています。この街道は、江戸―京都を結ぶ東海道の裏街道として、たくさんの人が行き来しました。中山道には六十七の宿場が置かれ、その内の鶉沼宿は今の鶉沼西町にありました。二ノ宮神社のあたりは、今もそのおもかげをわずかに残しています。

ここにも道しるべが……

緑苑へ行く交差点に常夜燈があります。

これは鶉沼宿の東の入口にあたります。ここを東町の方へ行くと、新聞屋さんの前か



鶉沼宿の東入口の常夜燈



三叉路の写真



お地ぞう様の写真

らなだらかな坂が続きます。そのためここは「長坂」
とも、「赤坂」ともいわれたりしました。しばらく行くと、つきあたりの三叉路に小さな祠があり、中にお地ぞう様があります。前だれをはずして見ると、
「左江戸并せんこうじ江」

ときざまれています。このお地ぞう様は、中山道の道しるべにもなっていたのです。ここで道が急に曲っています。おそらくこれは、宿場がせめられた時、敵の見通しを悪くするためにされたものでしょう。

うとう峠の一里塚

お地ぞう様を後にして、左へ登って行くと、しだいに坂がけわしくなってきました。今のようにほそうきれではないこんな急な坂をのぼるのは、たいへんなことだったでしょう。合戸池でひといきつき、さらに山道には行って行くと、左手に

【一里塚】
一里ごとに街道
の両脇につくら
れた塚。

1里=約4キロメートル
1丁=約109メートル
(町)
1里=36丁

「うとう峠一里塚」

の立て札があります。今は木がしげっていてよくわかりませんが、旅人のめじるしとして、大切なものでした。

一里塚から道はさらにけわしくなり、しばらく行くと右手の木やしげみのおくにお墓を見つけることができます。表に、

「小田原宿喜右衛門菩提の墓」

とほつてあります。ここでおいはぎにあつて、殺された人を、供養しているものだと言われています。その墓石の左右の面に、

「太田へ一里二十丁、鶺沼へ十六丁」

ときざまれています。このお墓も、中山道でなくなった人をとむらいながら、また道しるべでもあったわけです。



小田原宿喜右衛門の墓

うとう峠の一里塚

うとう峠をこえてか

らは、うつそうと木がしげり、今は道もはつきりしません。山あいに木曾川まで続き、川ぞいに坂祝の町にはいっていきます。むかしの人はこちらをどんな思いで通ったのでしよう。

みなさんも地図を見ながら、中山道を歩いてみましょう。



中山道を歩こう

2 中山道を通った人々と宿場をささえた人々

中山道を通った人々

この中山道をどんな人が通ったのか考えてみましょう。中山道を通った人を調べてみると、近江や富山の商人・旅人・伊勢神宮や京都などのお寺まいりの人や武士などさまざまです。

なかでも参勤交代による大名行列で通った人の数は、たいへんなものでした。というのも、大名行列は一度にたくさんの人や馬が移動するからです。この大名行列のために、人々が休けいしたり泊まったりする「宿場」がつけられました。

また荷物を運ぶための人々や馬も必要になり、宿場に備え付けました。宿場の分だけでは足りないこともあり、近くの村から人馬を出す制度もつくられました。これを「助郷」といいます。さらに助郷でも足りないときは、「加助郷」といって遠くの村からもかりだされました。こうした宿場や助郷が、



本陣（桜井家）跡

参勤交代について調べてみよう。

街道を通る人々を助け、街道が発達しました。

中山道を通った人のうち、もう一つ多いのが、姫君の通行でした。中でも和宮の通行は史上最高と言われ、資料によれば、二六、八四〇人、馬七二〇疋が移動したといわれています。そしてこのとき、宿場から十里（約四〇km）も離れた所からも、人馬を集めたそうです。

助郷に苦しむ村人

次に、宿場周辺の人々について考えてみましょう。助郷の多くは、天候のよい四月か九、十月でした。というのも四月は、暖かくなり、人や物の移動が活発になるためです。九、十月は、秋で晴れた日が多く、旅をするにはよい季節です。また収穫の時期でもあり、生産物の移動が多くなるためです。

ところが、この時期は農業も忙しいときです。そのようなときに、働き



和宮の行列のようす

手である若い男や馬をかりだされては、仕事がかどらなくならず。また、かりだされた者も慣れないことをやるので、まごついたり、失敗したりします。すると、言いがかりをつけられたり、きびしくあつかわれたりしたようです。

立ち上がる農民

では、それに対し農民はどうしたのでしょうか。ただ黙って受けていたわけではありません。助郷をゆるめてほしいと

文久三年（一八六三）定助郷歎願書

今度、中山道鶴沼宿の定助郷をおおせつかりしましたが、この村は東に郡上川（長良川）という大きな川があつて、たびたび出水し、年に十回ほど大水となり交通に難儀をしますし、西・南・北は三方を山坂にかこまれていきます。米の収穫高は七百二十石（一〇ハトン）あまりで、家の数は百軒あまりありますが、百姓として働いている者は七十五・六軒で、すべて天水にたよつて耕作しています。しかもよそから村へ入つて耕作したり、村を出て耕作している者は一切ありません。また、耕作も人手が少なく、田の手入れも行きとどかず難儀をしております。馬も村中に十匹ほどいますが、隣村までも荷物を運ぶような成馬は一匹もおりません。もちろん、鶴沼の宿までは四里ほどございますし、人馬が出たとしても、日数がかかり難儀をいたします。（中略）年貢米のほか、御膳米（幕府献上の米）を出すため、大ぜいの人手がかかり、老若男女が十月頃から三月頃までかかる。などが書かれています。鶴沼宿までは、川越えをしなければなりませんので、人馬とも前日に出なければなりませんし、翌日には加納宿までは四里八丁（約五キロメートル）加納宿より村までは三里、ま

訴えたり、ときには一揆を起こしたりしました。これらのことを考えてみて

も、中山道が通っていることにより、宿場が発達し、旅もしやすくなり、商業も発達しました。しかしその一方で、宿場の近くの村人は、宿場をささえるために、いろいろな苦勞をしていたことがわかります。

文久一年の和宮の通行以後、助郷を出す村がふやされました。山県郡加野村（今の岐阜市加野）もその一つでした。助郷の負担に反対する百姓たちが、幕府の代官所にやめてほしいと願ひ出たのが、下の史料です。

た、太田宿より村までは六里もあり、途中で渡舟に乗らなければなりませんので、夜にでもなければ村へ帰るのも難儀をします。つまり一日のご用に三日もかかるありさまで、たびたびの出水で川どめともなれば、ご用にもさしつかえありません。そういう事情ですので、どうか、鶴沼宿の近くの村にくりかえていただきますよう、重ねがさねお願い申し上げます。でございます。

文久三年
岩田 鐵三郎 御代官所
濃州 山県郡 加野村
庄屋 茂左衛門
" " 甚右衛門
" " 源助
" " 新助
" " 年寄 善兵衛
" " 作兵衛
" " 駒之助

御勘定奉行所
※定助郷＝助郷
「ふるさと藍川」より

鉄道ができる前と後のようすをくらべてみよう。

七、ひらけてきた鶴沼

(一) 発達してきた鉄道

明治になって、馬や馬車にかわる新しい交通手段が発達してきました。その代表は鉄道で、東海道本線が明治二十二年（一八八九）に神戸、東京間が開通し、全国に鉄道がしかれていきました。しかし、鶴沼を通る高山線の建設は、もっとあとになりました。

高山線の開通

大正三年（一九一四）、ヨーロッパを中心にしておこった第一次世界大戦によって、国内の景気がよくなり、高山線建設の計画がすすみました。大正九年（一九一九）六月、岐阜から各務原にむかって、工事が始められました。

工事は、鉄道工事専門の会社がやり、地元の人々は、あまり働



できたころとかわらない今の鶴沼駅

きには出なかつたようです。

そのころは、今のように機械もなく、ほとんど人の力にたよっていました。

各務原台地から鶴沼駅までは、たくさんの盛り土が必要でした。そのため、東町あたりの山をけずって、土を運んだそうです。

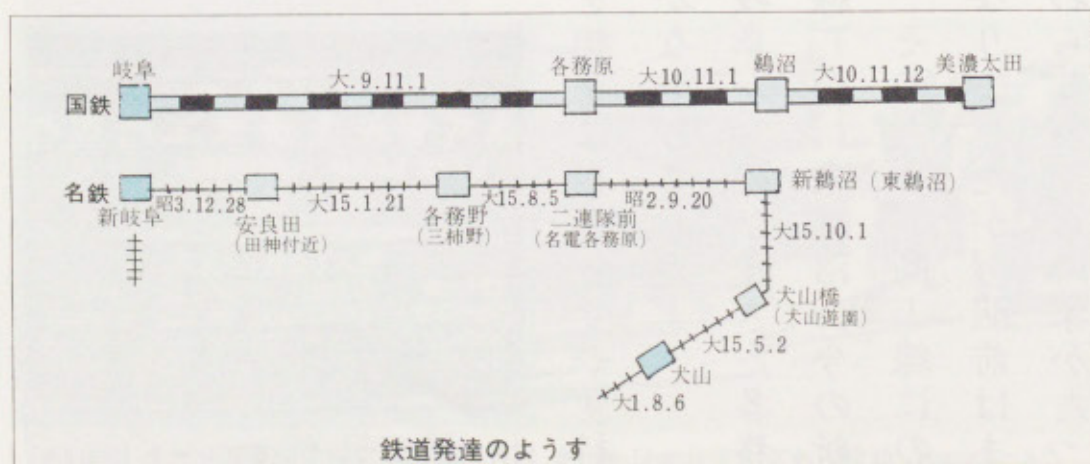
また、鶴沼駅から坂祝駅までは、木曾川ぞいの

かけっぶちで、そのためトンネルを三つもほらなければなりません。このむずかしい工事をやりとげた喜びが、岩谷観音に残る石碑にあらわれています。

大正十年（一九二一）十一月一日、多くの人々に迎えられて



「坂祝駅開設記念」の石碑（大正10年）



鉄道発達のようす

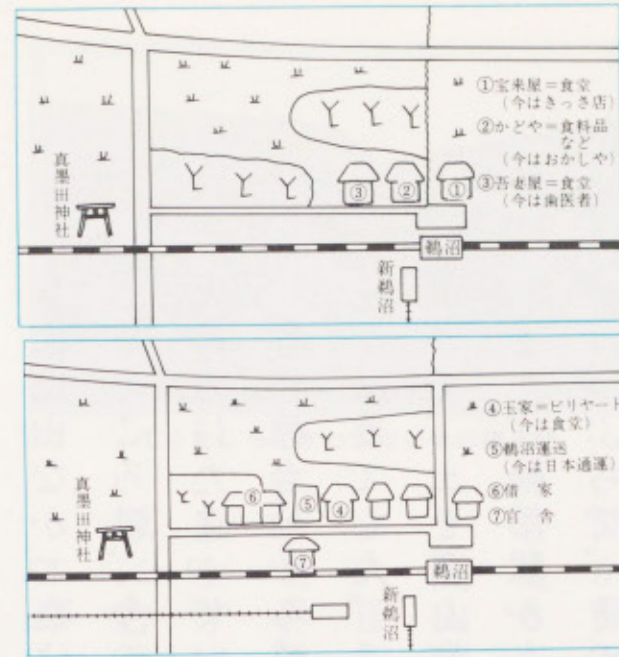
鶉沼駅の客（1日あたり）

大正11年	230人
13年	332人
昭和2年	651人
5年	266人
8年	267人
10年	310人

鶉沼駅に汽車が入ってきました。

にぎわう駅前

鶉沼駅は、田んぼのまん中にできたので、まわりには家は一けんもありませんでした。その後、名古屋電気鉄道（今の名鉄）が、新しくできた犬山橋をこえて新鶉沼まで来たころから、だんだん家がたちはじめました。駅



駅前のうつりかわり 上、大正のおわり 下、昭和のはじめ

前には、汽車にのるお客を相手にした食堂や食料品、日用品などを売る店がならびました。

昭和二年（一九二五）、岐阜からのびてきた各務原鉄道（今の名鉄各務原線）が、東鶉沼（今の新鶉沼）まで開通しました。そのため、高山線にのる人は、だんだん少なくなりましたが、駅前はずますにぎわい、今とかわらないぐらい家がたつ

てきました。

鶉沼駅であつかつていた貨物は、米、木材、まつたけ、まゆや生糸という農産物がおもでした。特に、まつたけは、昭和のはじめには県下の生産高で、今の鶉沼台あたりの山で、たくさんとれました。

秋になると、駅前からまつたけがりの団体客がぞろぞろと山にむかっていました。



まつたけがりでにぎわう駅前（昭和30年ごろ）

可児はま子さんの話

鶉沼駅ができたときは、小学四年生でした。学校（今の鶉一小）の子どもたちがそろって、駅まで開通のお祝いに参加したことを覚えています。そのころの駅は、まわりは田んぼばかりで、駅前から西のお宮さん（真墨田神社）まで道があっただけです。犬山橋ができた頃、角屋さんができ、私の父が宝積寺から出て来て「宝来屋」という食堂をはじめました。今の歯医者（武藤さん）も、宝積寺から来て、食堂や食料品を売ってみえた。一番駅がにぎわったのは、戦争が終つてすぐの頃でした。名古屋の方から下呂の方へ、食料の買い出しに行く人や、兵隊から帰ってくる人で、食堂もいそがしかったものです。



天神川鉄橋についているプレート（大正9年）

貞照寺へ行
つて貞奴につ
いて、わかる
ことをみつけ
てみましょう。



貞照寺本堂

校下にある大きなお寺、貞照寺は、昭和八年に、川上貞奴という女性が建てたものです。女性でありながら、これほどのお寺を建てた、川上貞奴とは、どんな人物なのでしょう。

日本ではじめての女優

貞奴は日本ではじめての女優といわれています。貞奴は明治二十七年、新しい演劇をめざしていた、川上音二郎と結婚し、その影きょうを受けて女優になりました。

貞照寺の縁起館には、女優貞奴についての多くの資料がおさめられています。その資料を見てみると、貞奴が音二郎といっしょに、世界各地を演劇をしながら回っていたようです。特に、外国では、「マダム貞奴」と



川上貞奴

(二) 貞照寺と貞奴



舞台姿の貞奴

よばれ、たいへん評判になりました。貞奴のやった演劇は、それまでの歌舞伎から新しい劇(新劇)への橋わたしの役目をはたしたのです。貞照寺の本堂の玉垣にきざまれている数多くの俳優の名は、そんな貞奴の姿を物語っています。

電力王を助けて

東京でくらしていた貞奴が鶴沼に貞照寺を建てたのはどういうわけがあったのでしょうか。

音二郎が明治四十四年に病気でなくなると、貞奴は音二郎の後を受けついで、演劇をつづけました。このころの貞奴に何かと手助けしてくれていたのが、福沢桃介です。桃介は、国内に数々の水力発電所を建設し、日本の電力王とよばれていました。

玉垣にある
俳優の名を調
べてみましょ
う。



玉垣

〔大井ダム〕
 上部の長さ
 二五七・八m
 高さ五三・四m

この桃介の最後の大事業が、木曾川をせきとめて大井ダムをつくるというものでした。大正十年、工事は始まりましたが、こんな大きなダム建設ははじめてのことで、工事は思うようにすすみませんでした。



お不動様に願う貞奴



工場現場での桃介と貞奴

貞奴は、桃介といっしょに、工事現場へ行き、深い谷底まで下りて、働く人々をばげました。貞照寺の本堂の羽目板に彫られている浮き彫りの中には、貞奴がダムの完成をお不動様に願う姿がえがかれています。

大正十三年、大井ダムは三十二人のぎせい者を出しながらもついに完成し、現在も人々に電気を送りつづけています。

貞奴は大井ダムの完成をお不動様に感謝して、昭和八年、木曾川をのぞむ、この地に貞照寺を建てたのでした。

貞奴の年表

明治四年 (一八七二)	東京日本橋に生まれる。
明治二十七年 (一八九四)	川上音二郎と結婚する。
明治三十二年 (一八九九)	世界めぐりに出発。女優貞奴となる。
明治四十一年 (一九〇八)	東京に「帝国女優養成所」をつくる。
明治四十三年 (一九一〇)	大阪に帝国座をつくる。
明治四十四年 (一九一一)	川上音二郎がなくなる。
大正元年 (一九一二)	貞奴一座が朝鮮で刺を行なう。
大正六年 (一九一七)	貞奴、女優を引退する。
大正十三年 (一九二四)	大井ダム完成する。
昭和八年 (一九三三)	貞照寺を建てる。 よく鶴沼をおとすれ、晩松園ですごす。
昭和二十一年 (一九四六)	熱海の別荘で病気でなくなる。(七十五才)

木曾川のほとりにねむる

貞奴は、貞照寺の門前に、晩松園とよばれる別荘も建て、鶴沼へ来た時は、木曾川の流れを見て、心をいやしていました。

昭和二十一年、貞奴は病気でなくなり、貞照寺に墓が立てられました。貞奴は、今も、貞照寺から木曾川の流れを見守っています。



貞奴の墓

鮎のお礼の姿見 (横山てる子さんの話)

わたしの家は、やなをやっていたので、昭和十八年ごろ、貞奴さんのところへよく鮎を届けていました。貞奴さんはお酒が好きだということなので、お酒をさしあげたこともありました。貞奴さんは、きれいで人なつこくて、近所の人は別荘のそうじに行ったりしたようです。貞奴さんは、お世話になったお礼に土地の人たちいろいろな品物を分けていました。わたしの家も、りっぱな姿見(鏡)をいただきました。

(三) 戦争のころの鵜沼

ここにも戦死者が

昭和六年（一九三一）、日本は中国と戦争をはじめ、さらに十六年（一九四一）には、アメリカなど世界の国々を相手に太平洋戦争を始めました。そのため、若い男の人は、兵隊として戦地に行かなければならなくなりました。

近くの墓に行って、調べてみよう。



戦死した人の墓

わたしたちの校下にも、戦争によって悲しい思いをした人がたくさんいます。東町の墓地の墓石に「★」のしるしがついたものや、「レイテ島ニテ戦死」などときざまれたものを見つけました。これらは、兵隊として戦争に行つてなくなった人のものです。ちようどお墓まいりにみえたおばさんに、当時のことをきいてみました。

戦争のころのようすをたずねてみよう。

おばさんの話

わたしの弟も、戦死しました。弟はたった一人の男の子で、家のあととりでしたが、戦争のため南方の島へ出征しました。弟は両親のことを気にかけて、戦地からとどく手紙の終わりには、いつも「父母をたのむ」と書いていました。それが、そういう子にかぎって死んでしまうのですね。父も母もそれはひどい悲しみようで、ふたりともいっぺんに弱り、一年後には寝たきりになってしまいました。そして、まもなく父がなくなり、わたしは、当時すでに結婚して出ておりましたが、一人残された母を看病するため、もどって来ました。その母も父のあとをおうようにまもなくなくなりました。

おそろしい空襲

各務原には、陸軍の飛行場があり、川崎航空機（今の川崎重工）では軍用機を作っていたため、アメリカ軍の攻撃目標の一つになっていました。戦争も終わりに近づく、毎日のように空襲がありました。校下に大きな被害があったのは、昭和二十年六月二十六日の山崎空襲でした。

この空襲によって、大塚山にひなんした二人がなくなり、一人がうでを



空襲をうけた川崎航空機（昭和20年）

戦争をなくすためにどうしたらよいか考えてみよう。

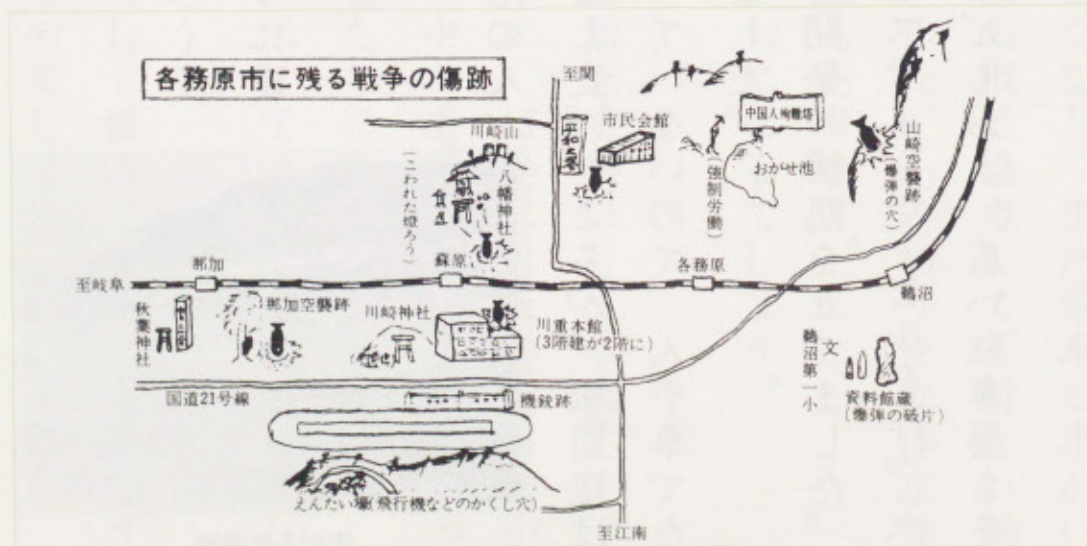
戦争や兵器のない時代に

各務原市は、岐阜県のなかでいちばんはげしい爆撃を受けました。それは、戦争に関係した軍事施設があったからです。

戦争体験者の話をきいたなかで、東町の後藤さんのことばが心に残りました。

「戦争なんかやっちゃいかんとか、最近よくいわれているが、武器づくりはちっともやめん。なんでつくるんや。つくらにやいいんや。そしたら、だれも悲しい思いをせんでいいに……。」

自分も六十年前にシベリアに出征し、太平洋戦争ではむすこをなくしたおじいさんは、強いことばで話してくれました。



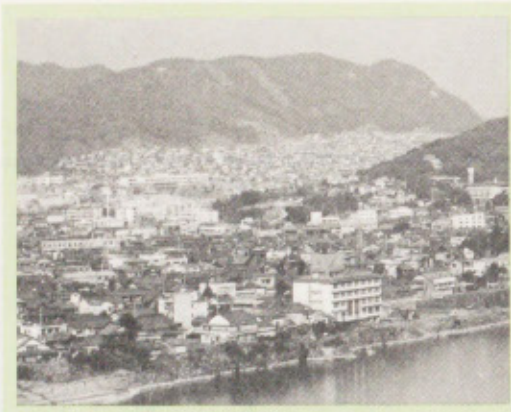
爆弾によってできた穴

空襲で家族をなくした丸山さんの話

空襲だということで、九時ごろ祖母、母、兄嫁、それに近所の人とともに、うら山へ逃げました。防空ごうはあったけれども、暗くて湿気臭く、私は入るのがいやでした。山の方へ逃げたのは、防空ごうへ入るよりも安全だと思ったからです。その山には、自動車を通れる道があったため、軍事物資がかくしてあると思っただけです。B29の三機編隊が十分間かくくらくらく飛来し、九発の爆弾を投下しました。私は目と耳をふさぎ、地面にふさりましたが、機関じゅうのたまか爆弾の破片かどちらかはわかりませんが、私の横腹をかすっていったことをおぼえています。近くに母がいたのですが、心臓のあたりに爆弾の破片を受けて死んでいました。即死でした。兄嫁は手の関節を三分の二ほどえぐられ、手はぶらぶらになり、かかどの所に貫通していました。爆弾の落ちた所は岩場でしたが、六畳間ぐらいで、深さ一メートルぐらいの穴があき、そのそばには、破片がつきささった大きな松がたおれていました。

——「各務原空襲」より——

もぎとられるという悲しい被害がありました。今も大塚山には、爆弾によってできた大きな穴が残っています。かたい岩に直径二メートルもの穴をあける爆弾のおそろしさが伝わってきます。まわりの松の木は、今も穴から外にむかってたおれたままです。



わたしたちのふるさと

校下に住む人が手をたずさえ、美しく住みよい町づくりをすすめるとき、心のふるさとができるのでしよう。

わたしたちのふるさとには、美しい木曾川など、わたしたちの大切な財産です。これらの財産を、そのまま未来に伝えていくことは、わたしたちの責任です。

駅や道路がよくなることは、わたしたちの生活を便利にしてくれます。

心のふるさとをもとめて

道路もよくする計画があります。犬山橋は古くなり、また電車と車がいつしよに走って、とても危険です。市では、犬山市と協力して、新しい橋をかけるよう国などにはたらきかけています。また、ふみ切りを立体交差にし、坂祝へぬける国道のバイパスを作る計画もあります。

駅周辺の再開発によって、各務原市の東の中心になるでしよう。



混雑する犬山橋

大正の末ごろとあまり変わっていないので、人や車でたいへん混雑するようになりました。そこで市では、駅周辺の再開発の構想を立てました。二つの駅を一つにした大きなステーションビルを作って、その中に商店や銀行や病院などもおき、広い駐車場もそなえようというのです。

これからの町づくりについて考えてみましょう。

(四) 鵜沼のあした

わたしたちの校下は、ここ十数年の間に大きく変わりました。これからの町づくりが、どのように進んでいくのか考えてみましょう。

各務原市の東の中心に

鵜沼東部にはいくつも団地ができ、たくさんの人が鵜沼駅や新鵜沼駅を利用するようになりました。ところが、駅周辺は



広がる住宅地

「ふるさと鶴三」歴史年表

年代	日本のできごと	郷土のできごと
約一万年前～ 約二二〇〇年前	狩りや漁のくらし 米作りが始まる	(宝積寺や山崎に、縄文時代の遺跡がある) (宝積寺や山崎に、弥生時代の遺跡がある)
約二二〇〇年前 四世紀～七世紀	各地に大きな古墳がつくられる	金繩塚がつくられる(六～七世紀ごろ)
六四五	大化の改新が始まる	
六七二	壬申の乱がおこる	壬申の乱で村国男依が活躍する(六七二)
七一〇	奈良に都をうつす	
七九四	京都に都をうつす	
一一九二	源頼朝が鎌倉幕府の将軍となる	
一二二一	承久の乱がおこる	承久の乱で木曾川の戦いが起きる(一二二一)
一三三八	足利尊氏が室町幕府を開く	
一四七八	戦国時代となる	大安寺が建てられる(一四一一)
一六〇三	徳川家康が江戸幕府を開く	鶴沼城が信長におちる(一五六四)
一八六八	明治維新が始まる	鶴沼村が尾張藩の領地となる(一六一二) 松尾芭蕉が鶴沼に来る(一六八五) 和宮が中山道を通って江戸へ嫁ぐ(一八六一)
一八九四	日清戦争がおきる	鶴沼に小学校(しんしん義校)ができる(一八七三)
一九〇四	日露戦争がおきる	鶴沼郵便局ができる(一八七四) 濃尾大地震で大被害をうける(一八九二)
一九三一	満州事変が起こる	高山線開通、鶴沼駅できる(一九二一)
一九三七	日中戦争が始まる	犬山橋ができる(一九二五)
一九四一	太平洋戦争が始まる	犬山線が新鶴沼駅までできる(一九二六)
一九四五	日本の敗戦	日本ラインが日本八景となる(一九二七)
一九四六	日本国憲法ができる	各務原線が東鶴沼駅までできる(一九二七)
一九五一	サンフランシスコ講和条約が結ばれる	貞照寺が建てられる(一九三二)
	日本の産業が急速に成長しはじめる	鶴沼村が鶴沼町となる(一九四三)
一九六四	東京オリンピックが開かれる	各務原空襲で校下にも爆弾が落ちる(一九四五)
一九七〇	大阪で万国博が開かれる	伊勢湾台風で大被害を受ける(一九五九)
一九七二	沖繩が日本に復帰する	ツヅキボウ鶴沼工場ができる(一九六〇)
		ライン大橋ができる(一九六一)
		各務原市ができる(一九六三)
		鶴沼に団地ができはじめる(一九六八)
		鶴沼第三小学校ができる(一九七四)

ふるさとめぐり イラストマップ

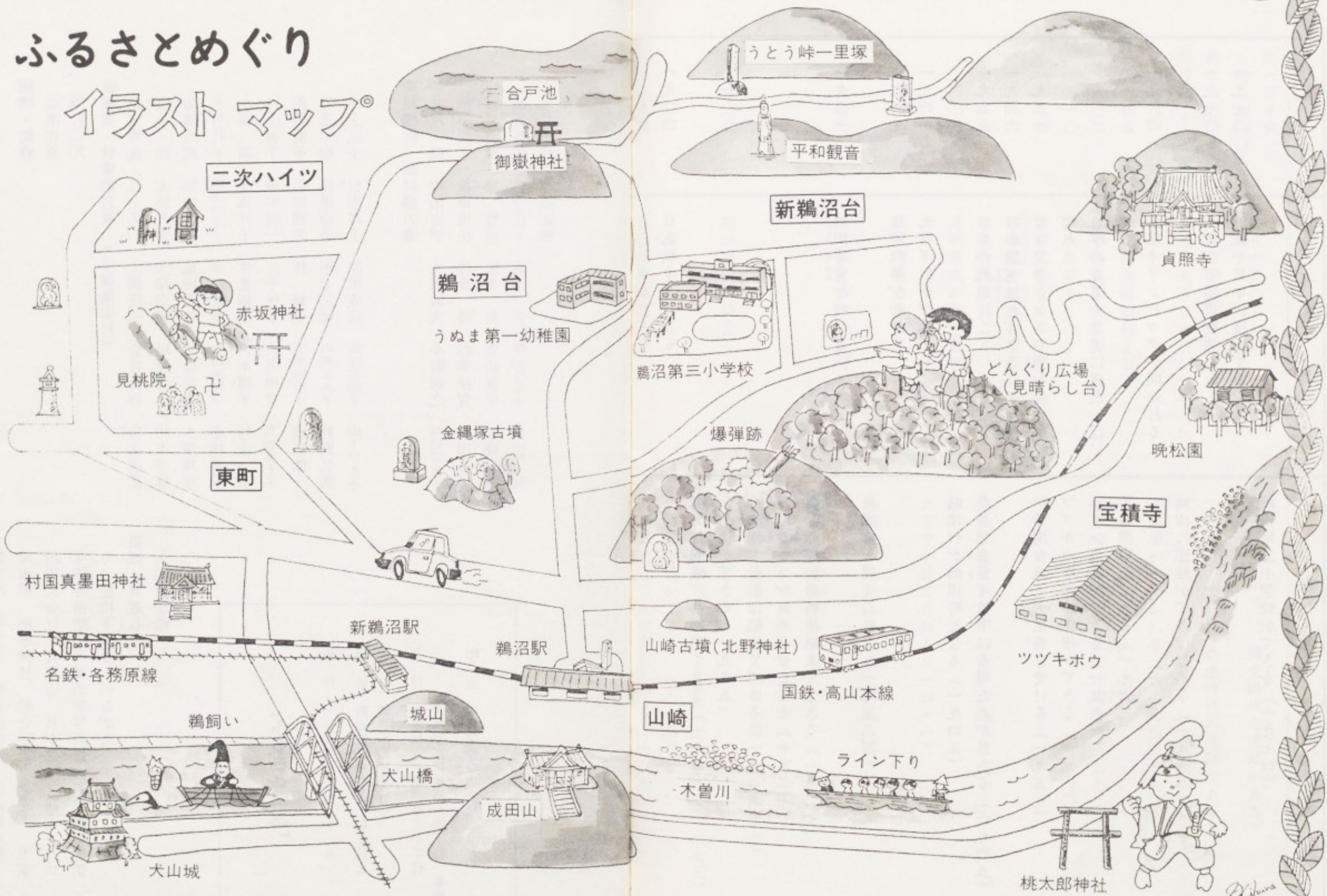


Illustration by [unreadable]

「こがねの鶴川」を作った人（敬称略）

顧問・監修

桑原吉雄

浅野弘光

執筆者・執筆協力者（*は編集委員）

足立秀成 五十川均 犬飼睦子 岩井秀行 魚次龍雄*
 塩谷 朗 大橋久也 大畑幸美 尾関利昌 柏木孝彦
 加藤尚武 加納展志 亀田芳包 河合澄雄 木原邦彦
 木村孔子 熊田加津子 幸田友美 小島美和子 小林洋子
 小森 嵩 小森昇子 佐光裕美 白木暉子 杉山 潔
 杉山規子 田中鴻一 辻千佳子 永縄照良 名和真千子
 西村愛子 浜田博之 林 繁生 平嶋佳世子 藤田俊一
 二又 均 松尾玲子 水上真由美 六鹿ふみ子 村岡弘美
 村上弘子 村瀬洋子 諸屋俊彦 安江喜和子 山下ひとみ

資料提供・取材協力者

井戸 稔 梅田吉平 大沢波夫 小野暢之 可児はま子
 薫田源市 後藤俊治 佐藤 隆 杉本洋育 千田富三
 林 貞雄 堀 智恵 松本 勲 丸山友弘 武藤鉦満
 武藤哲義 武藤美佐子 横山 晃 横山てる子 横山 実
 好井敏雄 渡辺正勝

鶴沼第一小学校 鶴沼東福祉センター 各務原市役所
 各務原東消防署 各衛サービス 角屋 関西電力今渡
 電力所 空安寺 郷土出版社 国鉄鶴沼駅 小林住宅
 清水屋 洲原神社 総合写真センター 玉家 都築紡
 績株式会社 貞照寺 日本ライン観光 ハローフーズ
 宝積寺消防団 美志奈写真館 名鉄新鶴沼駅 ヤマワ
 その他校下の多くの方がた

表紙・見返し

久保田正剛

「こがねの鶴川」
 刊行 一九八五年三月三十一日
 編集 鶴沼第三小学校十周年記念
 副読本編集委員会
 発行 各務原市立鶴沼第三小学校
 各務原市新鶴沼台四丁目一番地
 印刷 中邦印刷株式会社



11000977
各務原市図書館

返却日案内

この本は、きめられた日までに、お返しください。
最後の日付が、あなたの返却期限です。



各務原市図書館



各務原市図書館
110009776

各務原市立
鵜沼第三小学校